

草双紙 江戸日本における絵と文の融合 Kusazoshi : Illustrated Japanese Books in the Edo Period

岩淵 恵

IWABUCHI Megumi

In the Edo period, before the birth of Dowa, there were books for children called aka-hon, one kind of Kusazoshi. Kusazoshi presented a combined style of stories and pictures. These were mainly based on otogi-soshi, a collection of ancient Japanese fables including those written especially for children.

思い出の草双紙 童話作家^{はまだひるすけ}浜田廣介は、『童話文学と人生』に収められた「思い出の草双紙」という随筆に、草双紙という一群の本について記している。

「・・・それらは草双紙の類であって、江戸期における通俗的なさし絵入りの読み物である」ⁱと簡単な定義のあと、さらに詳細に、この文の執筆当時（昭和42年）の広辞苑から草双紙の意味や体裁などを調べ、このような洞察を加えている。

婦女、幼童、および一般大衆の読物であったけれども、その草双紙は、変体仮名の木版彫りであったから、それらの人のだれにも読めるというものでなく、多くのばあい、読み手があって、聞く人たちが、まわりにいたということになる。幼童は、もちろんのこと、婦女、男性のおとなたちでも文字の読めない人たちの多かった時代とすれば、そのことを承知しながら、草双紙は、変体仮名を常に用いていたからである。このことは、それらの本が読み手によって多くの人に語られること、こうして、それらを聞き知った多くの人から、さらに話が他のものに伝わることを意味しているⁱⁱ

なお最近の1998年度版の日立デジタル平凡社『大百科事典』には、「江戸中、後期に行われた挿絵入り読本」と定義され、なお、「赤本、黒本あるいは青本(黒本・青本)、黄表紙と進展し、装丁変革を経て合巻(ごうかん)に定着、明治中期まで行われる。草双紙の称は

上述 5 様式の総称だが狭くは合巻と呼ぶ。」ⁱⁱⁱ

赤本は主に婦女子、児童を読者対象としたものであった。さらに合巻（草双紙）を元にした歌舞伎狂言台本を草双紙物とよんだ。劇化のはじまりは、山東京伝の読本《復讐奇談 安積沼(あさかのぬま)》(1803)と合巻の《安積沼後日仇討》(1807)に取材した南北の《彩入御伽艸(いろえいりおとぎぞうし)》(1808 年閏 6 月江戸市村座)であった^{iv}

と説明されている。

山東京伝は江戸後期を代表する読物作家である。すなわち今で言うところの大衆小説家で、高木敏雄の『童話の研究』によれば「童話」の語の意味をはじめて明らかにした人である。京伝が「童話」という語を含む『骨董集』を書いたのは文化 10 年(1813 年)のことで、それはグリム兄弟の『子供と家庭のための童話集』の翌年の作である。ヨーロッパの童話の歴史がグリム童話を源流の一つとして始まったのならば、日本の童話の誕生時期もけっしてそれにひけをとるものではない。

児童文化研究者アン・ヘリング『江戸児童図書へのいざない』によれば、江戸庶民芸術研究家のリチャード・レインはこう指摘しているという。

・・・鳥居派の諸画家は、子供の本の挿絵し絵に特に力をいれたのである。これらの昔話・伝説の小型本は 18 世紀の日本文学、美術の未踏の宝庫の一つである。(中略)表表紙より中の挿絵に物語性が中心になるもっと複雑な場面があるが、どれも同じ高い水準のものである。それによって子供の文学の種類としてもっともすぐれたものになっている。またどんな国、どんな時代でも文芸と美術の融合としてはもっとも成功したものであるといえる。^v (傍点筆者)

挿絵と文の融合 英国の詩人ウィリアム・ブレイク William Blake の詩画集『無心の歌』*Songs of Innocence* が出版されたのは 1789 年、日本の年号でいえば寛政 10 年のことである。先述 R. レインの指摘によれば、ちょうどその頃に、日本でも文と絵が融合した子供の本がつくられていたことになる。挿絵と並び、着せ替え人形や組み立て絵(今でいうペーパークラフト)など、「おもちゃ絵」と呼ばれるものがある。これらも歌川派の絵師、一勇斎国芳(1797 - 1861)など当時一流の浮世絵画家が描いたという。^{vi} 天保 13 年(1842

年) その国芳と山東京山(山東京伝の弟)は絵と文のコンビをくみ『朧月猫の草紙』をつくる。古典『御伽草子』の中の「猫の草紙」をもじったものだろうか。山東京山は兄京伝ほど有名作家ではなかったが、この、文章と一流の画家による挿絵という先駆的な業績がこの時代におこなわれていたという事実は評価されてよい。

ところで「猫の草紙」を含む渋川本というものが、今日『御伽草子』として一般に流布している。渋川本は、江戸時代享保年間(1716-36)に「御伽文庫」というセットで刊行された絵入刊本である。23編のうち子供の読み物としては『鉢かづき』『物くさ太郎』『一寸法師』『浦島太郎』『酒呑童子』があるが、『酒呑童子』の奥付に「大坂心齋橋順慶町 書林渋川清右衛門」の刊記があることから、渋川版と呼ばれている。先行研究によるとそれより古く明暦から寛文の間(1655-73)に京都で刊行されていたとされている。その中の「猫の草紙」だけは成立が早く、1600年代初期であろうと推察されているという。なお、フランスで「長靴をはいた猫」を含むペロー童話集が編まれたのは1694年のことであるから、それと比較しても「猫の草紙」の成立は早い。

「猫の草紙」は、慶長年間、京の禅僧によってつくられたのではないかと今日の研究では推察されている。慶長7年(1602)年8月中旬、洛中に猫の網を解き放せと命令する高札が立てられた。猫は喜ぶが、鼠は猫を恐れて外へ出られない。ある夜、鼠の和尚が京に住む僧侶の夢に現れ、鼠がどうして人に憎まれるのかを説いて聞かす。次の夜、僧の夢の中に虎毛の猫が現れ、自分は虎の子孫である、昔網でつながれていたという。猫は僧から殺生をやめよと諭されるが、猫は鼠を食うことをやめはしないと言い張り、僧は返答に窮する。明け方、また例の鼠が来て、もうがまんできないから、鼠一族で相談して、近江国にいったん退くこととする、という。最後に、高貴な家に飼われていた猫三匹が猫解放令を褒め称えておわる。西洞院時慶(ときよし)の《時慶縁記》慶長7年の条に、当時猫についての高札がたてられたことが記されていたとあるから、この話はそれを笑いで批判したものと考えられる。そうだとすれば「権力の理不尽さを笑いで風刺する」という意味で、室町末期から形を整えつつあった狂言のつくりと同様である。

絵と文の融合という形は、江戸の赤本以前にその萌芽がみられる。室町後期から江戸中期につくられた奈良絵本という絵巻にも『御伽草子』が題材としてとりあげられている。奈良絵本の題材には他に幸若舞の「舞の本」からとられたものがあるという。幸若舞は当時能と平行してあった芸能で、織田信長が好んだことで有名であるが、やがて衰退した。その織田信長が天正2年戦国大名上杉謙信に送ったとされる「洛中洛外図屏風」が現

在米沢市上杉博物館に国宝として所蔵されている。その屏風絵の一部に、「千本閻魔堂」で行われていた「念仏狂言」の様子が描かれている。念仏狂言は一種の宗教劇で、仏教の教えをわかりやすく庶民に説くためおこなわれていたという。これが最古の狂言の図だとされ、『天正狂言本』の成立も同じころのこととされている。日本最初の外国童話集の訳書である『伊曾保物語』が九州天草で成立したのはそれから数年たったのことである。



「洛中洛外図」狩野永徳筆、桃山時代、国宝、上杉博物館蔵に
描かれた「千本閻魔堂の念仏狂言」

なお昭和10年刊の『書誌学』第4巻におさめられている「赤本『鼠の嫁入り』」と題する一文によると、渋川本『御伽草子』成立とだいたい同じころの享保5年に「鼠の嫁入り」の赤本がだされたという。「鼠の嫁入り」は『御伽草子』には収められていないが、明治になって巖谷小波が編んだ『日本昔噺』に収められている。福田清人によると、巖谷の『日本昔噺』の題材の多くが、明治初期の外国人に日本の昔話を翻訳紹介した「ちりめん本」から採られたものだという。「ちりめん本」の多くの挿絵が絵師小林永濯（1843 - 1890）によって描かれている。小林永濯は一時狩野派に学んでおり、その影響を受けているといわれる。先述の狩野永徳筆「上杉本 洛中洛外図」では、桃山時代の庶民の生活とともに、子供の遊びの様子が描かれている（図参照）。



「洛中洛外図」狩野永徳筆、桃山時代、国宝、上杉博物館蔵

この一派に代々、このような「子供」に対する興味があったのだとすれば、本論文の動機の一つであるP・アリエスの『子供の誕生』の一章「子供期の発見」での指摘、「13世紀頃には、近代的な感覚にやや近いいくつかの類型の子供が出現する。」^{vii}「そして15世紀と16世紀の芸術と図像記述の歴史に、その進化のあとをたどることができる」^{viii}というテーゼは、1世紀ほどの遅れはあるが、日本にもあてはまるのである。『子供の誕生』のグラビア写真には、15世紀の子供の遊びの絵が描かれている。

やはり明治になって絵と文の融合は他分野でもおこなわれた。すなわち明治34年、東京新詩社刊の与謝野晶子『みだれ髪』の表紙は当時一流の画家藤島武二によって飾られ、新詩社の機関紙『明星』の装丁も芸術的配慮がなされたものだったという。それよりずっと以前すでに、日本独自の絵と文の融合があったことは驚きである。

消えた草双紙 廣介のエッセイには、下記のような少年時代の思い出が書かれている。

ランプの下で、父がコタツにあたりながら何かの本を読むのであるが、おおくのばあい、フシをつけて自分流に読んでいく。何を読んでいるのかなどと、そばから、わたくしは、ただの一度も注意をむけたことはない。(中略)父がコタツのそばにいないとき - 本読みによばれて家にいないとき、母がコタツに向き合って、むかし話をわたくしに聞かせて

くれたことである。ix

フシをつけて読むとは能か狂言の謡のことだろうか。廣介の生地、屋代郷は長く幕府直轄領だったため上杉領米沢への対抗意識が強く、文化面でも米沢の金剛流に対抗する意味で、謡が盛んにおこなわれていたことも考えられる。廣介と同時代の童話作家宮沢賢治と能のつながりを示唆した『能楽タイムズ』2002年2月号の「宮沢賢治と能」という対談記事には、賢治研究家の原子朗氏の発言として、賢治の蔵書には、『日本文学全集』明治23年版、大和田建樹『謡曲通解』明治28年版、『帝国文庫』明治26年版及び昭和3年版など能関係の書籍がみられるという。つまり賢治には能に対する興味があったのだとする。

一方廣介は、少年のころただの一度も父の謡に注意を向けたことはないと記している。父が伯母の家に本読みに行く間、母や祖母からむかし話を聞くのが楽しみだったという。ところで伯母の家の蔵の蔵書が虫干しに出される時があった。その中には巖谷小波の「でむしの往生」と題するお伽噺がのった雑誌『少年世界』など、1900年以前の雑誌もあって、その中に「草双紙」も保存されていたと廣介は回顧している。

それらの双紙は、かれらの祖先が、江戸見物とか、伊勢参りとか、そのほかの長旅をして、帰りのみやげに江戸の店から買ってきたもの、あるいは、そういう人たちの縁故によってもらったのだというもので、いちおうは保存の事を考えて、ふだんは出しておくことがなく、冬、雪が積もってしまうと、蔵からだして見て楽しむというものであった。草双紙の字は読めなくても、頁ごとに描かれている絵を見ることに興味があって、話の筋は知らなくとも、次つぎと見ていくうちにはわかるようにも思われた。x

それに双紙をひらいてみると、ある人間の顔は、だれかの指のしわざによって、その目も鼻もこすられていた。こすられて、和紙は、よれていたのである。それどころか、顔に墨をぬられてしまった人もいた。たぶん、だれかが、うちの人から、その草双紙の話聞いて、にくいやつだとばかり、子供心のいきどおりから、処罰、(一熟語略)をはかったものにちがいがなかった。xi

しかし、これらの草双紙は、こんにち郷里でも全く見られなくなった、と廣介は慨嘆している。その文の初出は昭和42年2月『児童文芸』であるから、それから考えると、草

双紙は昭和 40 年代初期には姿を消したものらしい。草双紙は江戸時代半ばの享保年間から明治初期まで約一世紀半盛んになったあと消えていったと廣介は書き、「絵本の文化もまた重要なのである」^{xii}と結んでいる。命短かった草双紙のはかなさと、やはり隆盛期のあと次々と姿を消した大正の童話雑誌を重ね合わせて詠嘆したのかもしれない。

同じ家のコタツで、同じ少年に向かい、昔話と謡がそれぞれ語られていたとは興味深い。成人した少年廣介はやがて「童話」という新しい昔話を書き始めるのである。

注

- i 浜田廣介「思い出の草双紙」『童話文学と人生』176 頁。
- ii 同書、177 頁。
- iii 『世界大百科事典』第 2 版、日立デジタル平凡社、1998 年。
- iv 同資料による。
- v アン・ヘリング『江戸児童図書へのいざない』くもん出版、1998 年、35 頁。
- vi 同書による。
- vii アリエス「子供期の発見」前出『子供の誕生』36 頁。
- viii 同書、47 頁。
- ix 前出『童話文学と人生』178 頁。
- x 同書、180 頁。
- xi 同書、181 頁。
- xii 同書、182 頁。

参考文献

- アリエス、P. 著、杉山光信・杉山恵美子訳『子供の誕生』みすず書房、1980 年 12 月
- 高木敏雄『童話の研究 その批判と分析』大平出版社、1977 年 5 月。(1911 年、婦人図書刊行会発行のもの
の復刊)
- 徳田和夫『新潮日本古典文学アルバム』16『お伽草子・伊會保物語』新潮社、1991 年 9 月
- 鳥越信『はじめて学ぶ絵本の歴史』、ミネルヴァ書房、2001 年 12 月、初版
- 浜田廣介『童話文学と人生』集英社、1993 年 4 月第二刷、(初版発行 1969 年 2 月)
- ヘリング、アン『江戸児童図書へのいざない』くもん出版、1998 年 8 月初版
- 『世界大百科事典』日立デジタル平凡社、1988 年

参考論文

青木道喜、原子朗対談「能楽対談 452 回 宮沢賢治と能」『能楽タイムズ』
2002 年 2 月号」能楽書林、に掲載

鹿島則泰「赤本『鼠の嫁入り』」、日本書誌学会編『書誌学 第 4 巻』汲古書院、
1969 年 9 月発行（1935 年、三省堂版を復刻したもの）に所収

図表引用

「千本閻魔堂念仏狂言の図」；米沢市上杉博物館『国宝 上杉本 洛中洛外図屏風』私家版、2001 年 9 月

「子供の遊び」；同書掲載